

山羊の新目標のイメージ

1. 山羊をめぐる情勢

我が国の山羊飼育は、戦前には「自給飼料で飼育できる自家消費に適した家畜」として発展し、戦後は食糧不足と農地の荒廃を背景に飼育ブームとなり、昭和32年には飼養頭数で67万頭に達した。

しかしながら、その後酪農が推進される中で、山羊飼育は飼養戸数及び頭数の減少が続き、山羊乳生産は、主に自家消費用として推移している。また、山羊肉生産は、沖縄県等の地域限定的な需要に対応し、沖縄県、鹿児島県等で行われている。

飼養される品種は、本州等は、乳用種である日本ザーネン種、沖縄、鹿児島等は肉利用を目的とする小型の在来種（シバヤギ、トカラヤギ等）が中心であるが、飼養頭数が減少する中で、日本ザーネン種と在来種等との交雑が進んでいる実態も見られる。

なお、山羊乳については、これまで自家消費がほとんどであったが、食の多様化等を背景として、山羊乳販売、チーズ・アイスクリーム等への加工販売のほか、機能性食品としての研究開発も一部行われている。

2. これまでの改良の取組と成果等

(1) 改良事業等の変遷

昭和10～30年代にかけて、海外から積極的に種山羊の導入が図られるとともに、畜産試験場及び家畜改良センター等において山羊に関する研究、系統造成及び種山羊の民間への配布が行われ、泌乳能力等の改良及び繁殖技術の開発が図られた。

家畜改良センターによる種山羊の民間への配布については現在まで継続的に行われ、昭和59年から開始された凍結精液の作成・配布と併せて山羊の飼養頭数及び能力維持の点で大きな役割を担ってきた。

(2) 成 果

日本ザーネン種の泌乳量は、年による成績の変動が大きいものの、増加傾向で推移してきた。

(3) 改良増殖等をめぐる課題

乳生産

泌乳能力等については、着実に改良がなされてきたところであるが、近年、山羊乳販売に向けた取り組みも行われており、販売利用も視野に入れた泌乳及び繁殖能力等の改良が課題となっている。

また、飼養頭数が減少し、交雑種が増加する中で、種畜頭数も減少していること

から、近親交配による影響及び間性^注の出現を防ぐとともに、優良な純粋種の確保及び供給体制の強化が重要である。また、山羊乳の冬場の確保が難しいことから、季節外繁殖等による周年供給が課題となっている。

注) 間性とは、胎内で胎児が発育する過程で正常な性分化が行われず、生殖器が雌雄の中間型を示し、繁殖能力を欠損するものをいう。

肉生産

山羊肉については、生産コストの低減が求められており、産肉性の改良とともに飼養管理技術の改善が課題となっている。

強健性の向上及び飼養管理の容易性の改良

飼養管理が容易であるという山羊の特性を活かすため、強健性、連産性等に配慮しつつ、高齢者にも飼養が容易な体格への改良が重要である。

3. 改良増殖目標

(1) 基本的考え方

自家飲用乳利用だけでなく、販売利用することも視野に入れて、泌乳能力、強健性等の向上を図るとともに適切な飼養管理に努めることとする。

(2) 改良目標

能力及び体型

ア 乳量の向上に努めるものとする。

イ 繁殖性及び発育の良いものにする。

ウ 強健で肢蹄が強く、体各部の均称がとれ、産肉性にも配慮しつつ飼養管理が容易な大きさのものにする。また、乳器に優れ、搾乳が容易なものにする。

改良手法等

ア 近親交配の回避に配慮しつつ、人工授精の利用に努めるものとする。

イ 次世代生産に当たっては、間性等不良形質の排除に努めるものとする。

ウ 山羊乳の安定供給のため、周年繁殖技術等の確立・普及に努めるものとする。

エ 純粋種の確保と供給体制の強化を図るものとする。

能力に関する目標数値

	総 乳 量
現 在	5 8 0 kg
目 標 (2 7 年度)	6 0 0

注：１）日本ザーネン種のものである

２）泌乳期間は２５０日程度

（３）増殖目標

飲用乳としての利用のほか、肉利用等の需要動向に対応し、草資源の有効利用により飼養頭数の維持増大に努めるものとする。